

ベトナム行

若いころからの東南アジア詣出から長い間隔をおいて、4年前から始まった南ベトナム行も今回で5度目となる、6/3～11の日程であったが、ベトナム行では初めての完全一人旅である。心配する向きもあるが若い時にタイ、マレーシア、フィリピン、インドネシアと何回か一人で行っているの本人はそれほど苦痛には思っていない。まあ、費用の負担が増えるのと言葉のコミニケーションのない部分を身ぶり手ぶりで解消する手間はあるものの相手もこちらの度胸を図るので卑屈にならず堂々と対処すればどうってことはない。かえって何でも一人で考えて行動すればよいので時間に余裕がありいつもより撮影チャンスが増えたのは利点だと思っている。暇つぶしに文庫本の推理小説を3冊持っていったがもう一冊あればよかったなど思っていたものである。意外に困るのは食事メニューのある店は少ないし、あっても読めないの見渡してうまそうなものを食べている人を見つけて指差し、同じ物を頼むのが一番であるが壁にはってあるものを適当に頼むときもある。当たりはずれもあるがうまかったものだけ覚えて1日おきに頼むとか、ロッテリアやマクドナルドを利用する時もある。朝は有名なフォーを食う時が多いがこれもどちらかといえばファーという発音でなかなか通じにくい、昼は菓子パンのようなものや柔らかなフランスパンに野菜や肉を挟んだ(バンミーという)ものやクッキーで過ごす、まあ、わずらわしさも多少あるが、チョウ採りの楽しみを考えれば何事もハッピーである。

一番の心配はチャーター車の運転手が時間や約束をまもるかの例の東南アジアスタイルであるが、ベトナムは他の国に比べて割とましな方なのであまり心配するほどではない。

石油高による物価の高騰はどこでも同じでベトナムも昨年と比べて皆1.5倍ほどの価格となっている。それでもガソリンはレギュラーで85円ほどと日本の半分ほどであった。日用品も少しあがっているなかで食品だけはほとんど変わっていないのは収入の少ない人の多い国として最低の抑えなのかもしれない。

バイク(ほとんど50ccクラス)全盛でそれがないと暮らせないというお国柄で、どこでもものすごい数で道いっぱいに広がって走っており車や横断者は小さくなっている。昨年までヘルメット未着用も容認されていて危ないなと思っていたが、今年から完全着用が義務づけられ大きな看板がたくさん立ち、取り締まりも強化されていた。しかし、3人乗り(こどもだけだと4人)は容認されたままである。それを取り締まったら暮らしていけないことを国も知っているのであろう。郊外に出ればそれに積載オーバで速度の出ない大型トラックが一杯加わり、道端はバイク真中はトラック、右から左から速度の出る車が追い越す、二重追い越しなどあたりまえである、その上道路工事と建設ラッシュによる煩雑が加わりそして右側通行…そんなところで運転できたらあなたは偉い!?

ホテルはホーチミン市内では2500～3500円くらいの所を選び、採集地近郊では1500～2500円くらいとなる、これで大体クーラーと冷蔵庫は常備されている。

さて、肝心なチョウのほうであるが、チョウは大抵雨期に多く乾季にはまず少ない。雨期は6月～11月、乾季は12月～5月となっているが、今年は雨期が少し遅れ気味で6月5日くらいからスコールが来て雨期に入ってきた、そのため初めは川も干上がっていてチョウは羽化したてが多くて数は少なめと昨年の7月よりもはるかに少なかった。

チョウについての報告はまた別途どこかに…ベトナム各地のホテルと車の手配は現地の知り合いであるMy 女史に国際電話やFaxを通じてお願いしておいたものであるが、最近のベトナムで感じたことや雑事について軽くお報せしておく。

6/23 から1週間ほど斉藤(太)、中原両氏が行くので、また、違った話があるのでは?と思っています。

* 新入会員 (小学2年生の最若会員です、よろしくお願ひいたします)

安達 友哉 〒113-0022 文京区千駄木 2-28-11 T: 03-5814-2925

* 例会予定日

7/15 8月休会 9/23 (第4火) 一連絡済み 10/21 11/11 (第2火) 12/16

* 新聞紙上より

砂糖水で餌付けして、アゲハチョウに色を覚えさせる(蟻川教授提供)



08.2.4.読売(9)

アゲハチョウ
色覚は4原色

アゲハチョウは、四つの色の組み合わせで微妙な色の違いを見分けていることが、総合研究大学院大学の蟻川謙太郎教授らの研究でわかった。3原色をもとに見分ける人間とは違う仕組みで、ミツの場所を鋭く探

しあてているらしい。英王立協会紀要に発表した。蟻川さんらは、アゲハチョウを砂糖水で餌付けして色を覚えさせた後、色の違いをどこまで見分けるか調べた。その結果、色の波長が約430、480、560ナ・メートル(1ナ・メートルは100万分の1ミリ・メートル)の3か所で、非常にわずかな違いを識別できた。

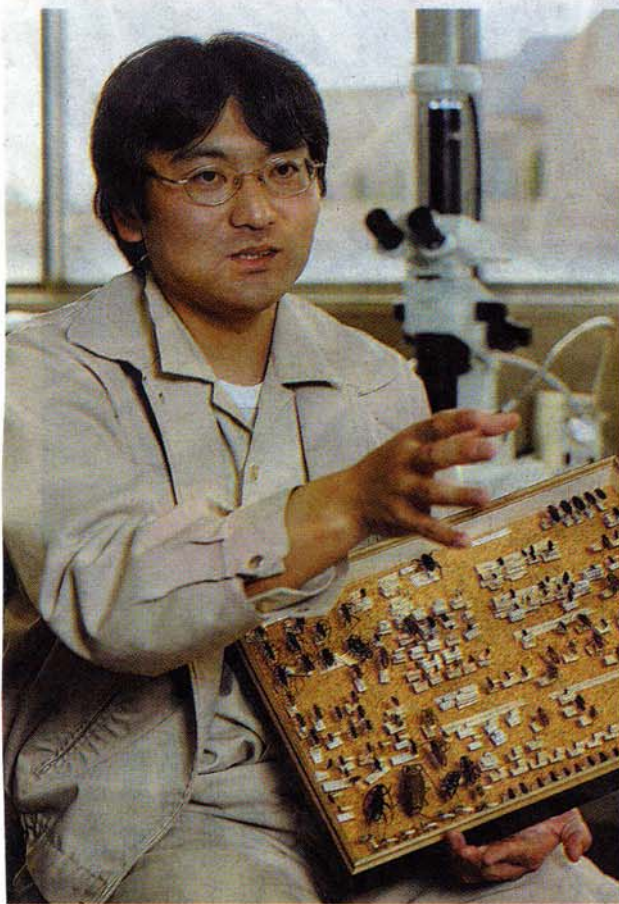
人間は、3原色のうち緑と青・赤と緑が重なった、波長が約500、600ナ・メートルの2か所で、1ナ・メートルの違いを見分ける。アゲハチョウの能力はこれに匹敵し、アゲハチョウの「4原色」は、紫外、青緑、赤だった。カメやキンギョ、ニワトリの色覚も4原色だが、無脊椎動物で確認されたのは初。

ボーツ、ボーツ。船の汽笛が響く千葉港。農林水産省の植物防疫官、角田孝夫さん(36)は、作業服にヘルメットという姿で貨物船に乗り込む。胸ポケットには必需品のルーペ。海外から運ばれてくる穀物や青果物を検査し、害虫や植物の病気を見つけるのが仕事だ。

千葉港は全国の港のうち、貨物取扱量2位。そこで荷揚げされる農産品は、千葉出張所の防疫官4人のチェックを受ける。船に入る時は大抵1人。合格証明書を出すかどうか、1人の「目」に委ねられる。

船倉の小麦は砂丘のようだ。足を踏み入ると、ひさまで沈み込む。ある時、ふいにかけていると、体長3ミリの黒い虫が見つかった。先端がゾウの鼻のように伸

害虫探して 船から船へ



虫の標本を手にする角田さん(千葉市の農林水産省横浜植物防疫所千葉出張所で) —森下綾美撮影

びている。ゾウムシの仲間かどあたりをつけ、事務所に持ち帰る。顕微鏡をのぞいたところ、胸に楕円の斑点があり、穀物を食い荒らす外来種とわかった。

地球に生息する虫は150万種以上。同じゾウムシでも、国内に生息する種は15年前に根絶するまで、政

府が費やした時とお金は22年と204億円。たった一匹の幼虫を見逃すだけで、大変なことになる。

防疫官は、食べ物だけでなく、輸入木材にも目を光らせる。材木の山によじ登り、虫が掘った穴がないか、じろじろと見回す。見つけたら、カナヅチとノミで削って「すみか」を突き止めるのだ。すると、いろいろな虫たちと出会う。樹皮を食べるもの、カビを餌にするもの、一夫多妻の虫がぞろぞろとメスを引き連れて現れることも。「奥が深いなあ」と感嘆する。

害虫は処分しなければならぬ。冷凍庫で凍らせた後、アルコールに漬けたり、悲しい場面もある。虫たちに罪があるのではない。悪気があってやって来たわけでもない。人知れず、小さな命を悼んでいる。

